



町分地区景観づくり構想（案）

2020.2

町分地区景観づくり構想検討委員会

川内村が取り組むまちづくり

産業振興、交通、福祉、暮らし、安全、教育、文化等、幅広く取り組んでいる

- ・「川内村第5次総合計画」（平成31年3月）
- ・「川内村まち・ひと・しごと創生総合戦略」（平成28年3月）
- ・「フタバグランドデザイン2020-2030-2050」（令和元年9月）

（具体的な取り組みの例）



「かわうちラボ」設立（令和元年5月）



移住定住ツアーの開催



「かわうちワイン株式会社」設立（平成29年8月）



田ノ入工業団地・国県道バイパス整備

景観づくり構想の位置付け

- 川内村では、『川内村第5次総合計画』において、基本目標を「川内村ならではの資源を活かした新たな農林業の確立と産業づくりを推進し、定住人口・交流人口を増やし、若者をはじめ住民一人ひとりが希望と誇りを持って暮らせるような、そして多くの人々を惹きつけるような魅力ある村となることを目指します」と定めている。
- その上で基本施策として、①村ならではの資源を活かした魅力的な「しごと」づくり、②交通・通信ネットワークの拡充、③健康で安心して生活できる環境づくり、④安心・安全な快適環境の村づくり、⑤心豊かな人と文化を育む村づくり、⑥持続可能な行財政運営と住民と協働の村づくり、を掲げている。

本構想は、上記の基本目標、基本施策の実現に向けて、「川内村ならではの資源」である「景観」を活かしたまちづくり施策について、町分地区を村内景観デザインの第一歩として具体的な構想イメージを検討するものである。

景観づくり構想策定の目的

- 東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故から八年が経過し、生活環境やインフラ整備等、様々な施策を実施してきたところである。
- 今後、持続可能な魅力あるむらづくりを進めて行く上で、**交流人口、関係人口を拡大していくための景観づくり**は重要となっている。
- 国県道バイパス化に伴い、旧道沿いとなる町分地区を村内景観デザインの第一歩とし、**「歩いて楽しいむら」「住みたいむら」「訪れたいむら」**の実現を目指していくための、「町分地区景観づくり構想」を策定する。

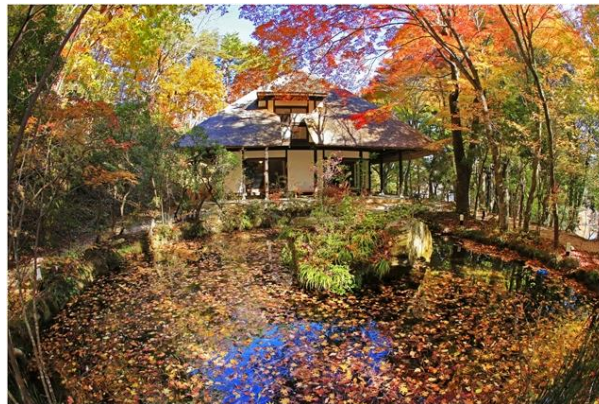
*「関係人口」とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流事項」でもない、地域と多様に関わる人々を指す言葉です。地方圏は、人口減少・高齢化により、地域づくりの担い手不足という課題に直面していますが、地域によっては若者を中心に、変化を生み出す人材が地域に入り始めており、「関係人口」と呼ばれる地域外の人材が地域づくりの担い手となることが期待されています。（出典：総務省「関係人口」ポータルサイト）

町分地区の活かしていきたい「強み」

- 自然・田園環境：気候、空、山並み、河川、水田、水路、樹木、花
- 自然的でゆったりとした住環境、暮らし、時間、景観
- 宿泊施設、商店、飲食店が複数立地
- 近接する文化交流施設：天山文庫、いわなの郷、かわうちの湯
- 義務教育学校川内小中学園建設
- 国県道バイパス整備：地区内通過交通の減少、富岡ICからの時間短縮
- 住環境整備事業の実施：子育て世代を対象とした賃貸住宅



町分地区の中を流れる水路



みちのくの文化交流の接点 天山文庫



子育て世代を対象とした住環境整備

景観づくりの方向性

- 町分地区が持っている「強み」をさらに顕在化させることで地域の魅力を高める。
- そのために、町分地区が持っている「強み」を楽しめるような整備や仕組みづくりを進める。
- 「義務教育学校川内小中学園建設」「国県道バイパス整備」「住環境整備」のような「大きな」（＝拠点や軸）プロジェクトとあわせて「小さな」（＝ネットワーク、面的）プロジェクトを官民が力をあわせて進めていく。



町分地区の「強み」を楽しむ時間や暮らしを生み出すことで交流人口、関係人口、定住人口を増やして行く。

景観づくりの施策

3つの「大きな」プロジェクト

- A. 義務教育学校川内小中学園建設
- B. 国道道バイパス整備
- C. 住環境整備事業

8つの「小さな」プロジェクト

1. 地区全体で安心して気持ちよく歩ける道にする
2. 水路や川沿いを歩ける/遊べるフットパスにする
3. 誰もがまちに出られる情報案内+モビリティを導入する
4. 自然的要素を魅せて、印象的な風景をつくる
5. 統一感あるまち並みをつくる
6. 村内の文化的拠点とつながる
7. 空き家・空き地・残地をみんなで活用する
8. 季節や暮らしを感じる企画イベントを実施する

A. 義務教育学校 川内小中学園建設

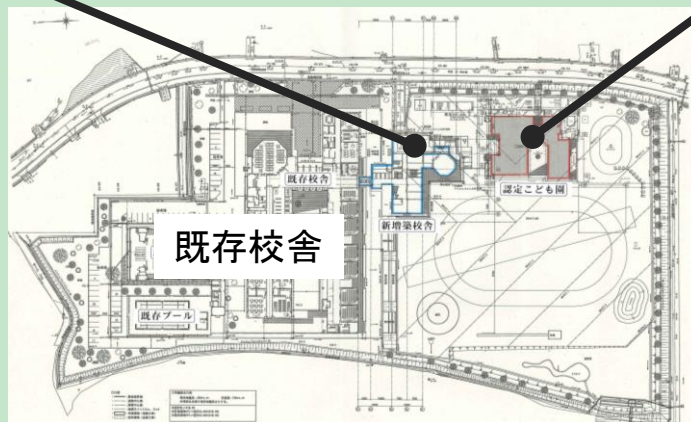
- 現在の川内小学校の敷地内に中学校・保育園関連施設を追加整備し、小中一貫プログラムの「義務教育学校川内小中学園」を建設する。
- * 義務教育学校川内小中学園の建設・運営に関する基本方針については、『川内村小中一貫教育・学校施設複合化施設整備基本構想・基本計画報告書』（平成30年3月）等の関連計画をご参照ください。



新增築校舎（中学校）

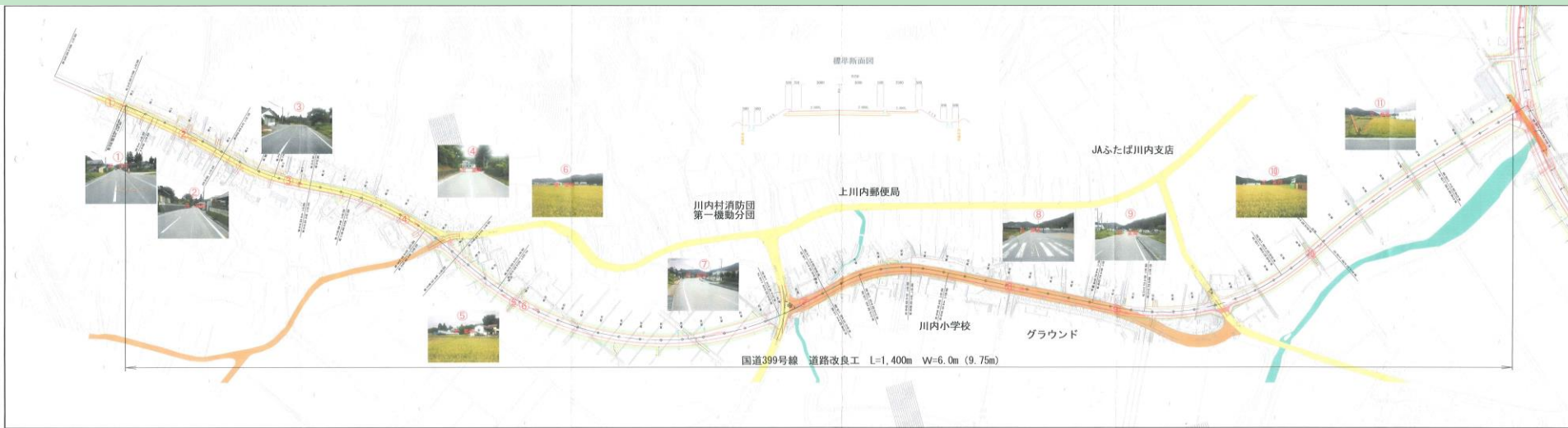


認定こども園



B. 国道バイパス整備

- 国道399号線および県道小野富岡線のバイパスが、ふくしま復興再生道路として、2020年代初頭の完成を目指して整備される。



国道399号線および県道小野富岡線のバイパス 平面図

C. 住環境整備事業

- JA裏の農地であった敷地に、子育て世代をターゲットとした村営住宅10戸、敷地の南北に貫く道路、公園的な緑地を整備する。

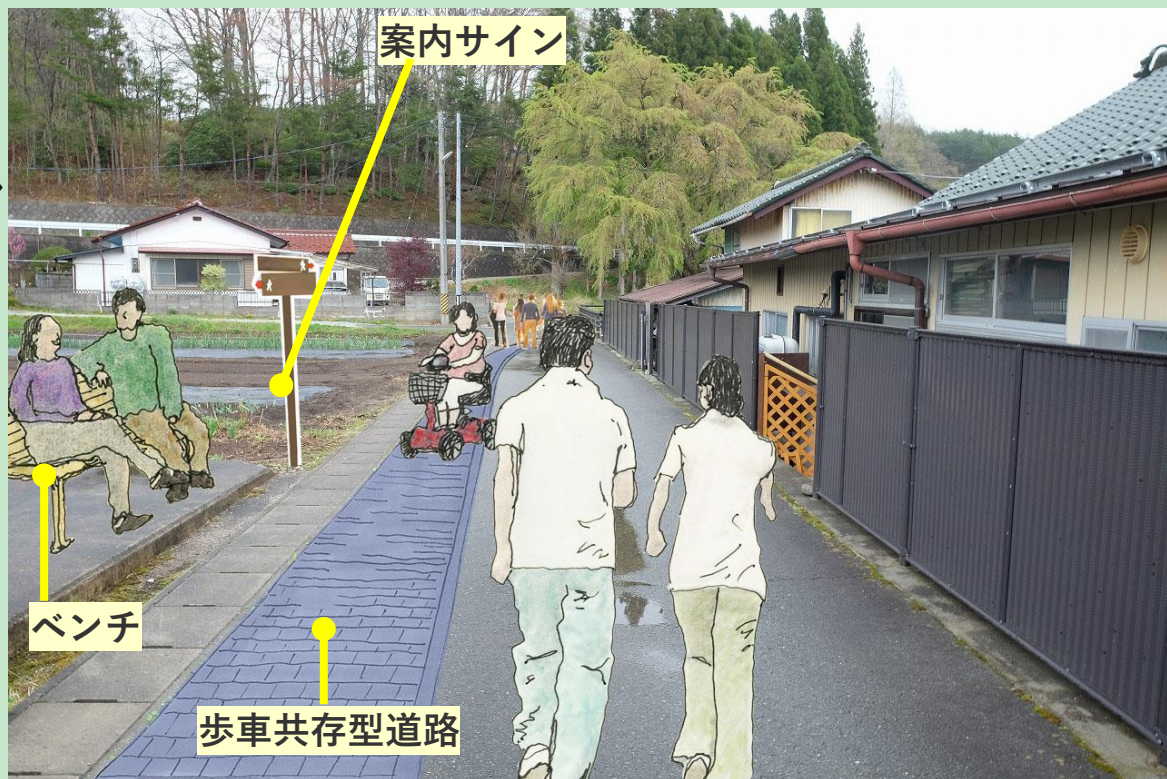


1.地区全体で安心して気持ちよく歩ける道にする (1/4)

- 現国道399号も含めて地区全体で歩行空間を充実させる道路デザインを採用し、電動カート等の通行にも配慮した横断勾配、舗装材とすることで、高齢者や来訪者も含めて誰もが安心して気持ちよく歩けるエリアとする。
- 街灯、ベンチ、サイン等の道路附属物についても道路や沿道の街並みとの統一感に配慮したデザインを採用しながら充実させる。



エリア内道路（一例）の現況写真



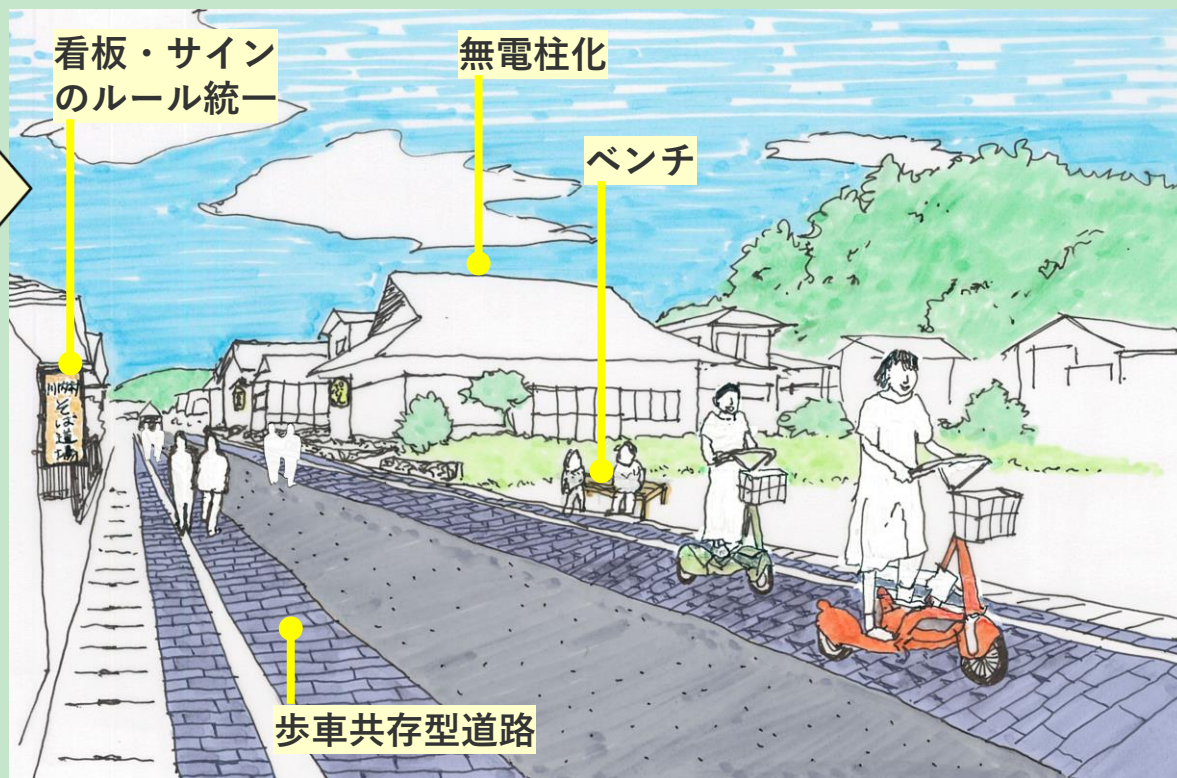
エリア内道路（一例）の整備イメージ

1.地区全体で安心して気持ちよく歩ける道にする (2/4)

- 現国道399号は、バイパス整備後は通過交通が少なくなることが予想されるため、歩行者がより歩きやすい道路デザインを採用する。
- 交通規制は現行のまま（双方向）としつつ、歩道舗装を車道側へにじみ出して施し、車が中央へ寄り、スピードを落とすよう誘導する。



現国道399号の現況写真



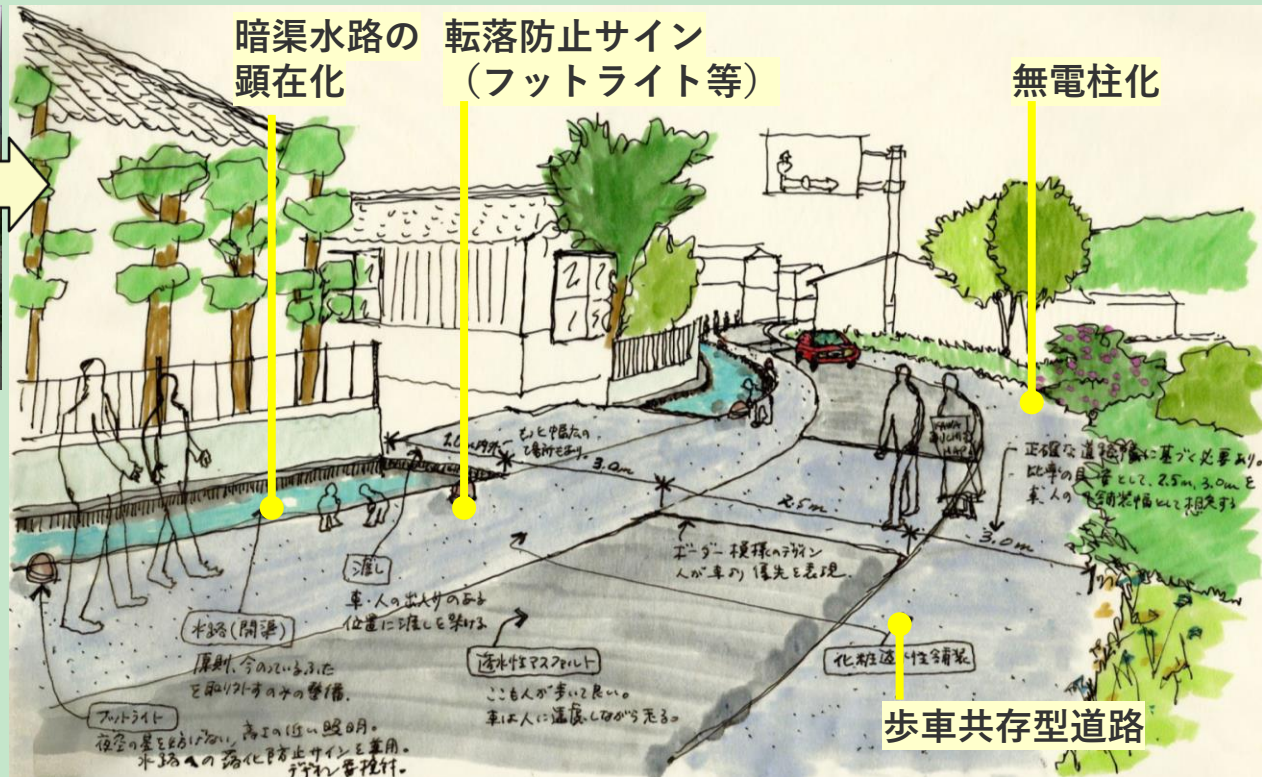
現国道399号の整備イメージ

1.地区全体で安心して気持ちよく歩ける道にする (3/4)

- 現国道399号では防災性や景観の向上を目的とした「無電柱化」、水を感じられる歩行空間の実現を目的とした「暗渠化された水路の顕在化」を検討する。



現国道399号の現況写真



現国道399号の整備イメージ

1.地区全体で安心して気持ちよく歩ける道にする (4/4)

■ 参考事例：歩車共存道路（島根県津和野町）

電柱が立ち並び、車で主役であった道路（写真左）を、歩行者のためのみち（写真右）として再整備した事例。無電柱化とともに道路照明柱の修景、舗装の美装化で沿道と調和した街路空間を創出した。舗装は、路側線よりも車道側まで歩道側の舗装を滲み出させ、車が注意して走行するようなデザインとなっている。検討段階で協議会や社会実験で徹底的に地域住民、行政、専門家の話し合いが行われた点も特徴である。



2. 水路や川沿いを歩ける/遊べるフットパスにする (1/2)

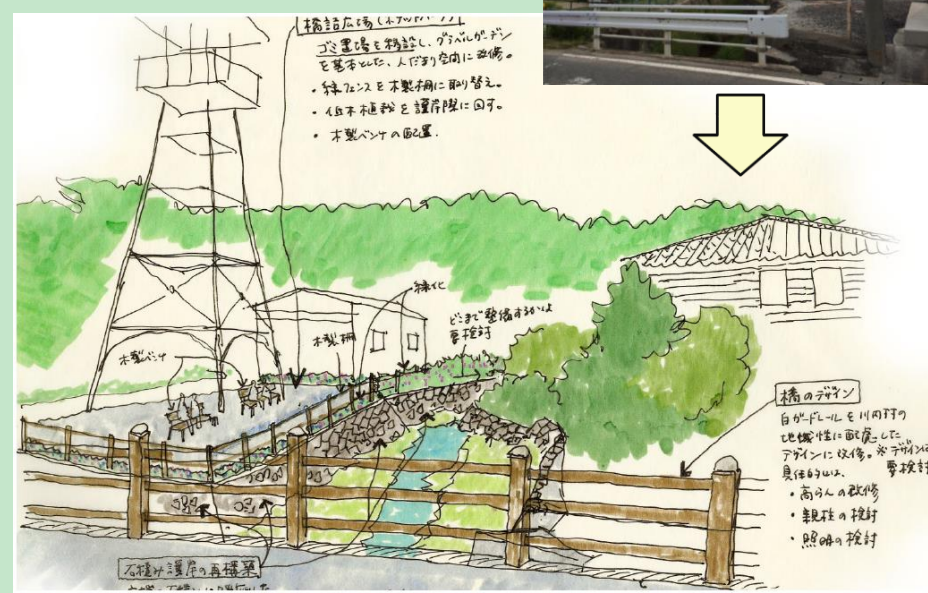
- 水路や木戸川沿いに、水が流れる水面や音を楽しみながら散歩できるフットパスを設える。
- フットパスの途中に、休憩して会話を楽しめるポケットパークを整備する。

現況写真



既存の水路脇に設えるフットパスのイメージ

現況写真



フットパスの中継地点に設けるポケットパークのイメージ

2. 水路や川沿いを歩ける/遊べるフットパスにする (2/2)

■ 参考事例：小さな自然再生（福岡県上西郷川）



自然石と間伐材を使ってつくる間伐材水制により、
水の流れを多様にし、様々な種類の生き物の生息場を創出！



上西郷川では2007年度より、市民・大学・行政で協力した多自然川づくりが進められており、これまで（2014年9月現在）に行われたワークショップやイベントは約50回に上っています。ワークショップでは、川の維持管理や自然再生手法についても議論されてきました。また合わせて魚類を対象としたモニタリング調査が行われており、その結果を見ながら小さな自然再生の工夫を導入するという考え方で改修事業を進めています。本稿で紹介する間伐材水制はその一環として取り組まれているものです。

経緯・目的

小学生と大学生が
力を合わせて瀬淵環境を再生

小学生、学生らの手作り「間伐材水制」で、水の流れを多様にし、生き物の生息場を創出

3. 誰もがまちに出られる情報案内+モビリティを導入する (1/5)

- サインやマップ等の情報案内を維持管理のしやすさ（質の維持）にも考慮しながら整備し、住民や来訪者が水路沿いフットパスや天山文庫等の拠点を心地よく散策できるようにする。
- ウォーキングバイシクル、電動カート等の歩行支援モビリティを導入し、誰もがまちに出かけられるインフラを充実させる。



川内村の風景に馴染むデザインの情報案内（サイン）を、拠点施設やフットパス沿いに導入する



高齢者の足の確保、来街者の利便性の高い周遊手段となるスローモビリティの例。写真は、歩くようにペダルを踏んで進む電動アシスト付きの「ウォーキングバイシクル」

3. 誰もがまちに出られる情報案内＋モビリティを導入する (2/5)

- 案内サインは、町分地区に存在する歴史的・文化的な資源についても設置し、住み人、訪れる人が地域の歴史文化をより深く理解できるように情報提供する。



安藤公の姫の
墓碑
(村指定史跡)



爆心地の碑



川内義民の碑



お地蔵

3. 誰もがまちに出られる情報案内+モビリティを導入する (3/5)

■ 参考事例：維持管理に優れたサイン等の材料①



割れ、腐れを抑制し、環境にやさしい保存処理木材「エコアコルウッド」の例。



海水に浸かる広島・厳島神社の柱にも採用。



「エコアコルウッド」を用いたサイン例。地域の方々の手作りで、塗装仕上げのサインが整備された事例。（長崎県佐世保市）

3. 誰もがまちに出られる情報案内+モビリティを導入する (4/5)

■ 参考事例：維持管理に優れたサイン等の材料②



スチールに塗装処理した柱、案内板のサイン例。景観を阻害しないシンプルなデザイン。



鋳物を用いた施設案内サインの事例。耐久性に優れる。



亜鉛メッキ リン酸処理の案内板サイン例。防錆効果が高く、経年変化により周辺景観と調和していく。

3. 誰もがまちに出られる情報案内 + モビリティを導入する (5/5)

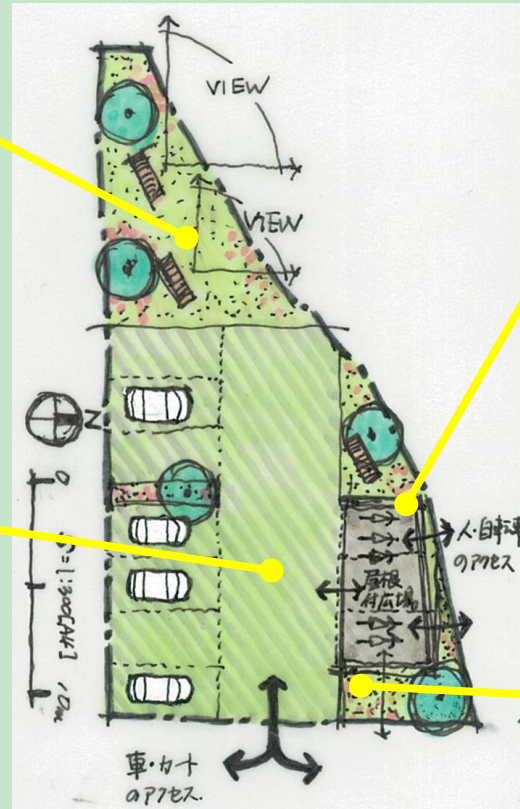
- 町分地区を訪れた人が駐車したり、自転車やウォーキングバイシクルに乗り換えたり、情報を得たり、休んだりするための「小さな交通拠点」を整備する。



景色が見渡せる休憩広場



緑化駐車場(マルシェの広場等にも活用可)



「小さな交通拠点」のイメージ



屋根付き広場 (ウォーキングバイシクル、電動カートの置き場等として活用)



まちなか誘導サイン

4. 自然的要素を魅せて、印象的な風景をつくる

- 町分地区を囲む山や田園風景、木戸川等の水環境を大切にし、それらを維持、向上するような取り組みを進めていく。鳥のさえずりやカエルのなき声等の音風景も大切な資源である。
- それらの自然的要素と人との関係（例えば、眺望）を顕在化し、感じられやすくするように眺望スポットを示す。また、これから進めるひとつひとつの整備、開発を丁寧に行なっていく。



山の稜線への眺望が確保できる場所はいくつかあるが、現在意識はされていない（川内村）



田園と背後の山並みが印象的な景観（川内村）



木戸川沿いの水面と菜の花、山並みの景観（川内村）

5. 統一感あるまち並みをつくる

- 公共建築、道路、河川、公園等の公共施設を対象とした川内村らしいデザインガイドラインや専門家の指導による検討体制を構築し、川内村らしい景観形成のモデルとなるように丁寧に整備を進める。
- 民間の建築の構成、外装、外構、サイン、照明等について、川内村らしいデザインガイドライン等を作成し、指導や支援の仕組みを構築し、統一感のあるまち並み形成を図る。



道路等の公共空間で景観に配慮した整備を行うことで、地区全体の魅力を高めて行くことができる（熊本県黒川温泉）



住宅と通りの間に、植栽・庭を設けたり、色を合わせていくことで、通り沿いの景観に統一感を生むことができる。川内村らしい樹種の選定も効果的である。

6. 村内の文化交流拠点とつながる (1/4)

- 天山文庫や麓山神社等の文化交流拠点と地区とのつながりを強化する
(例：案内サイン整備、天山文庫や麓山神社への道路修景整備等)
- 天山文庫の駐車場や駐車場からのアクセスルートを改善し、団体客、高齢者も含めたアクセス性の向上を図る。



天山文庫への道路修景整備と駐車場兼交流拠点イメージ

6. 村内の文化交流拠点とつながる (2/4)

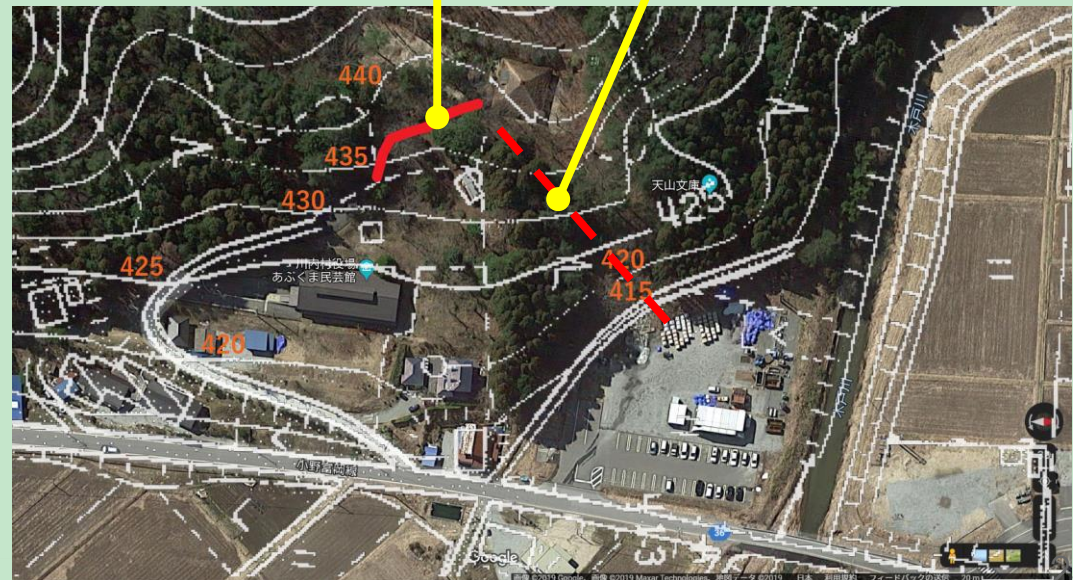
- 天山文庫内の歩きやすい動線を確保するため、景観や環境に配慮しながらバリアフリー動線の充実を図る。



敷地の地形において、最も緩い勾配が取れるルート新たなスロープの動線とする

新しいスロープの動線

復興事務所からの動線は勾配が急過ぎる



天山文庫のアクセス性改善のイメージ

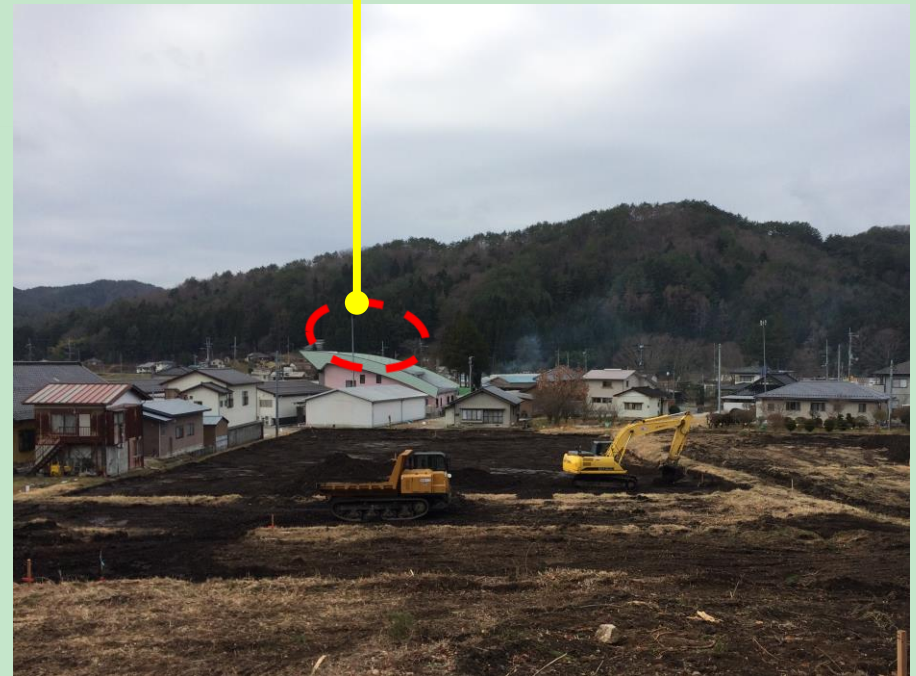
6. 村内の文化交流拠点とつながる (3/4)

- 天山文庫周辺の樹木を伐採するなど整理して、かつてのように町分地区から天山文庫が視認できるようにすることで、天山文庫と町分地区のつながりを強化するとともに、天山文庫を訪れるきっかけを高める。

樹木が年月とともに大きくなり天山文庫を隠している樹木。
伐採することで再び天山文庫を視認できる。



麓山神社付近から天山文庫を見た景観



住環境整備敷地から天山文庫を見た景観

6. 村内の文化交流拠点とつながる (4/4)

- 地域住民によって大切にされてきた麓山神社の環境再生の方策を検討する。
- 現国道399号沿いに天山文庫のコンテンツを含めた休憩施設の整備を検討する。



麓山神社の環境再生には地域の方々の手入れが必要



空き家を活用した市民の手づくりによる「おきのはた図書館ペチカ」（福岡県柳川市）＊「ペチカ」は柳川出身の詩人・北原白秋の童謡

7. 空き家・空き地・残地をみんなで活用する

- 空き家・空き地の活用は、所有者にだけ任せていては進まないため、地区全体で支援する仕組みが必要である。その際には、建築、不動産等の専門家の参加が不可欠である（参考例：一般社団法人柳川暮らしつぐ会）
- 国道バイパス整備に伴う残地で、農用地としての活用が難しい場合には、その活用についても検討を行う（例：村営駐車場、公園・広場）。

活用して欲しい人 暮らしつぐ会 つぎたい人
空き家持主 入居または購入希望者



空き家の活用を促進する柳川暮らしつぐ会の仕組み
(福岡県柳川市)



空き家をカフェ（焙煎所）として活用（徳島県神山町）28

8. 季節や暮らしを感じる企画イベントを実施する

- 川内村でよく見られる手入れされた前庭を来訪者に楽しんでもらうオープンガーデン（個人の庭を公開する）等の取り組みを検討する。
- 村民、学生が「まち歩きガイド」となり、川内村ならではの暮らしや歴史文化、歳時記のストーリーを提供する企画を検討する。



オープンガーデンは1日だけの催しとしたり、一定の期間だけとしたり、通年で行なうこともできる。



地区住民の思い出話を「へえ〜」「ほお〜」と聞きながら地域をめぐるガイドツアー「油津へえ〜ほお〜まちあるき」の取り組み（宮崎県日南市油津地区）

8つの プロジェクトを実施 する場所

① 地区全体で安心して気持ちよく歩ける道にする(ピンク線)



③ 誰もがまちに出られるモビリティ+情報案内を導入する(点)



⑤ 統一感あるまち並みをつくる(全体)



② 水路や川沿いを歩ける/遊べるフットパスにする(オレンジ線)



⑥ 村内の文化交流拠点とつながる



④ 自然的要素を魅せて、印象的な風景をつくる(紫点線)



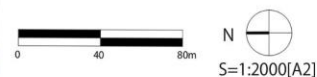
⑦ 空き家・空き地・残地をみんなで活用する(全体)

活用して欲しい人 暮らしつづけ会 つぎたい人
空き家持主 入居または購入希望者



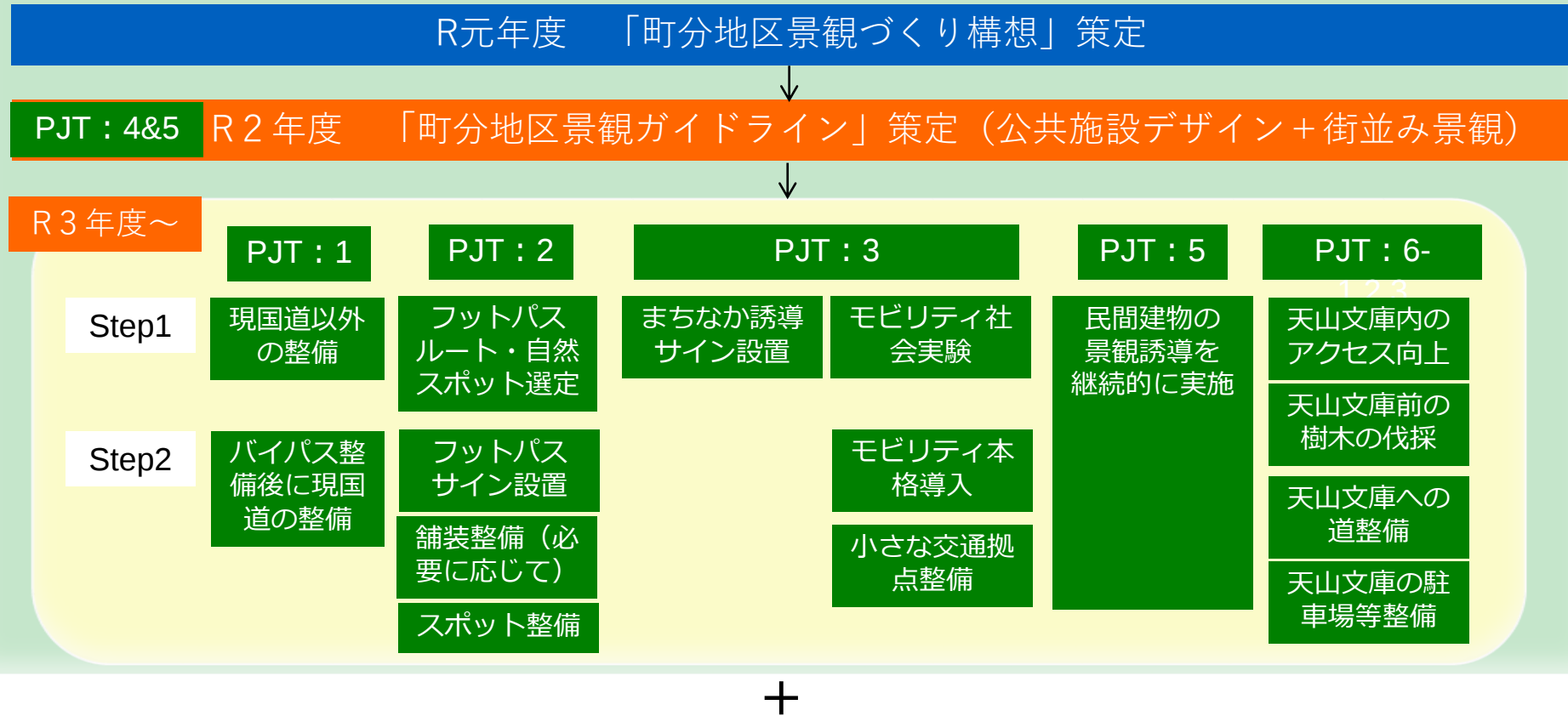
空き家の活用を促進する柳川暮らしつづけ会の仕組み(福岡県柳川市)

⑧ 季節や暮らしを感じる企画イベントを実施する(全体)

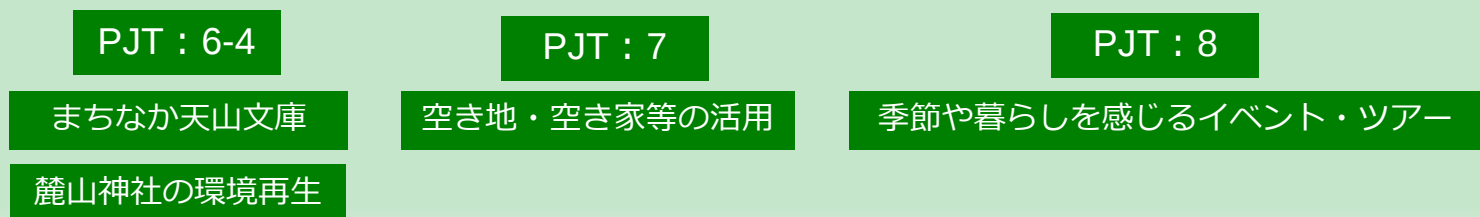


8つの小さなプロジェクトの実現ステップ

以下のプロジェクトは行政が主体となって、地域住民と協働しながら順次進める。



以下のプロジェクトは「かわうちラボ」や民間組織の連携によって順次進める。



景観づくり構想策定のプロセス

- 本構想の策定にあたっては「町分地区景観づくり構想検討委員会」（委員長：高尾忠志氏（九州大学持続可能な社会のための決断科学センター准教授））を設置し、令和1年6～12月に4回開催、活発なご議論をいただいた。
- 委員会で各委員（下表参照）からいただいた多くのご意見を踏まえて、川内村と九州大学の共同研究により構想案を策定し、令和2年1月にパブリックコメント、2月に地区住民懇談会を行い、最終とりまとめとする。

表：町分地区景観づくり構想検討委員会 委員名簿（敬称略、順不同）

1	第3行政区	区長	猪狩 丈	8	川内村	副村長	猪狩 貢
2	川内村婦人会	会長	井出 美穂	9	九州大学	准教授	高尾 忠志
3	川内村商工会青年部	部長	井出 健人	10	（株）TLA	代表取締役	竹林 知樹
4	川内村商工会		秋元 裕子	11	Life & Work一級建築士事務所	一級建築士	石川 裕子
5	あぶくま民芸館	管理人	志賀 風夏	12	相双建設事務所企画管理部	部長	旗野 直広
6	住民代表		秋元 博光	13	相双地方振興局企画商工部	副部長	結城 友次
7	住民代表		井出 裕子	14	ふくしま市町村支援機構	建築設備部長	長島 敏彦